

1. はじめに

「復興・防災マップづくり」プログラムは、東日本大震災の1年後の2012年度から石巻市の小中学校で開発、実践を積み重ねてきた災害復興・防災教育プログラムです。石巻市教育委員会とともに、実践校の教員の皆様、東北大学災害科学国際研究所、山形大学、神戸大学等の研究者グループ、国際NGOセーブ・ザ・チルドレン等が協働し、石巻市の教育復興における子どもたちの学習をサポートしてまいりました。東日本大震災から1年半後の2012年度に開始された当初は、大震災を直接経験した沿岸部の学校の子どもたちがその経験を乗り越え、被災した地域を「嫌いにならない」よう、「復興」に焦点をあてた未来志向の災害復興教育プログラムとして位置づけられました。

大震災から7年を経て、2018年度までに「復興・防災マップづくり」は市内16小中学校で実践されるようになりました。大震災の津波被害を直接受けない内陸地域へと拡大し、自然ハザードも洪水や土砂崩れが対象に含まれるようになり、2003年の宮城県北部地震の経験を学ぶ取組みも出てきました。2017年度からは、さらなる普及を目指して「石巻市復興・防災マップコンクール」が開催されるようになりました。

改訂版の作成にあたっては、「郷土の自然と暮らしを知り、防災を考える」の視点から、主に以下の3点での変更が加えられました。第一に、2017年度と2018年度の6校の事例が、「別冊① 実践事例集」に加えられました。第二に、「2. 単元計画の作成」「2.3 防災マップづくり単元計画例」を中学社会科や総合的な学習の時間等とのカリキュラム・マネジメントを通じた単元計画に刷新しました。第三に、「郷土の自然と暮らしを知り、防災を考える」をより具体的にサポートできるよう、「2.4 地域の地形、土地利用の変遷を理解するための地図とその活用例」をわかりやすく改訂し、別冊②に「『地理院地図』の利活用とその応用」を加えました。

石巻市内の震災復興が進む一方で、大震災を経験したことのない子どもや大人が増えていく中、地域に根ざした持続可能な災害復興・防災教育の実践がますます重要になってきています。「復興・防災マップ」の実践が、地域の郷土の自然と暮らしを知り、災害に備えるための一助となることを願っております。また、本手引きが「復興・防災マップづくり」に関心をお持ちいただく、日本・世界の皆様への手引書となることを期待します。

2019年3月吉日

桜井 愛子

東北大学災害科学国際研究所 防災教育国際協働センター 副センター長
東洋英和女学院大学 准教授

1 | 復興・防災マップづくりとは

「復興・防災マップづくり」は、2011年3月11日に発災した東日本大震災の被災地石巻市の小中学校において、総合的な学習の時間を用いて取組まれている災害復興・防災教育の学習プログラムです。

東日本大震災を経験した石巻市に生きる子どもたちが、「まち歩き」と「マップづくり」という「体験学習」を通じて地域の自然や歴史、復興や防災に関する情報収集を行い、地域の良さや魅力を再発見することを目指しています。また、災害からの復興が進む石巻市の子どもたちが、地域学習を通じて復興・防災に関心を持ち続け、災害に強いまちづくりに貢献していくことを期待しています。

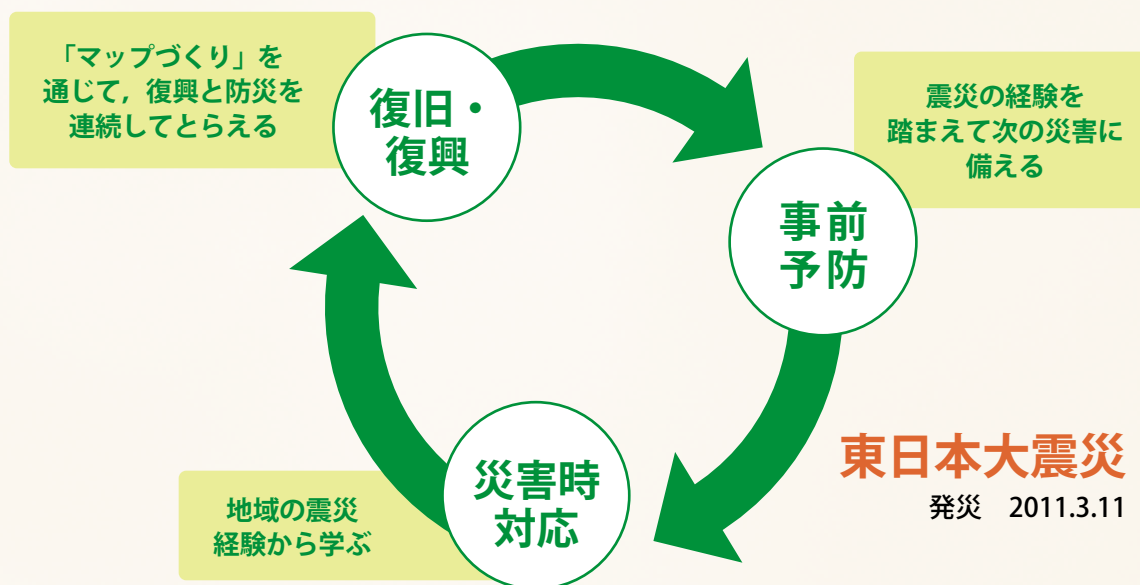


図1：災害サイクルと「復興・防災マップづくり」の位置づけ

「復興・防災マップづくり」は、基本的には以下の流れで行われます。学校、子どもたちの実情、地域の状況、扱うテーマや時数によって、適宜、変更すること、単元の一部にマップづくりを盛り込むことも可能です。

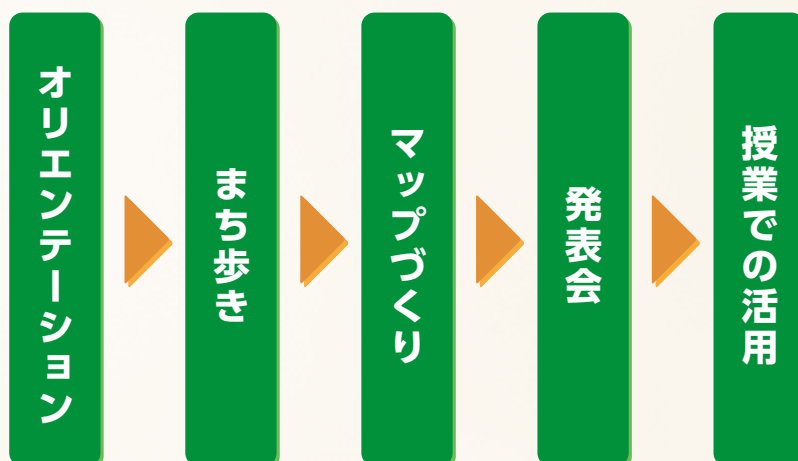


図2：復興・防災マップづくりの流れ

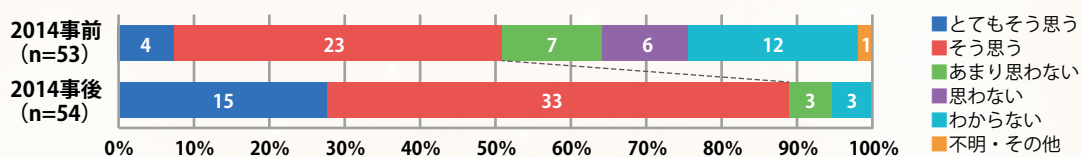
2 | 期待される成果

「復興・防災マップづくり」の実践を通じて、以下のような成果が期待されます。

- 子どもたちが地域の魅力を再発見し、地域を好きになる
- 子どもたちの地域の復興への意欲が高まる
- 子どもたちが自分たちの住む地域の地形やまち並みの変遷、地域の歴史、過去の災害履歴を知り、災害に対する脆さが時代とともに変化していることに気づき、「地域に根ざした防災」を考えることができるようになる
- 子どもたち自身が地域の役に立っているという社会的自己実現の機会になる
- 地域の復興・防災を学習することにより、子どもたちの間で防災意識が高まる
- 活動を継続することによって、学校の取組みとして学年を超えたつながりが醸成される
- 子どもたちの学習活動を通して、地域の大人と子どもたちとのつながりが育まれる
- 大人を含めた地域全体の復興や防災に対する意欲が高まる
- 将来のまちづくりの担い手を育み、持続可能なまちづくりにつながる

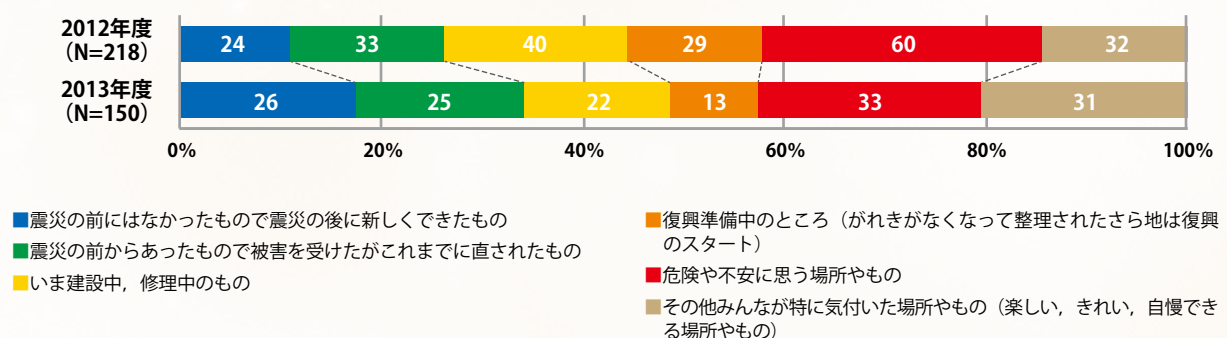
「復興・防災マップづくり」の学習を通じて、子どもたちの復興への参加意欲が高まっていることが確認されています。

図3 鹿妻の復興に、何か自分も役に立ちたいと思いますか（2014年度 鹿妻小学校4年生）



震災1年後（2012年度）と震災2年後（2013年度）の「鹿妻復興マップ」の比較から、地域の復興が着実に歩みを進めていることが子どもたち自身の手によって確認されました。

図4 「鹿妻復興マップ」における発見ポイントの分類別変化



3 | 実践の上で大切なこと

「復興・防災マップづくり」の実践に当たっては、以下の点に留意し、本手引きを参考にしながら各学校独自のプログラムとして実践されることを期待しています。

- 東日本大震災からの復興や災害の歴史を踏まえた、その地域ならではの学習テーマや着眼点を設定すること
- 子どもたちの主体的な学習の機会とすること
- 地域との接点を設けること（インタビュー、まち歩きの見守りに保護者や地域の参加を得ること、発表会を保護者や地域に対して行うこと、等）
- 教科とのつながりを図ること（各教科で学んだ災害、防災等に関する知識を自分たちの地域へと適用し「地域に根ざした防災教育」を実現する機会とすること）
- 石巻市防災副読本、社会科副読本等の石巻独自の教材や資料等の活用を図ること
- 学校で継続していける計画とすること（欲張らず、続けていけること）
- 子どもたちの手による情報や記録を学校独自の教材として蓄積を図り、学習材として活用すること

まち歩きでのインタビューを通じて、大人から子どもへと東日本大震災の経験が伝承され、地域の大人と子どもたちとの交流が生まれ、子どもたちの間で地域への愛着が深まっていることが確認されています。

図5 鹿妻の大人やお店の人に震災や復興のお話を聞いてどう思いましたか？（2014年度鹿妻小4年生）

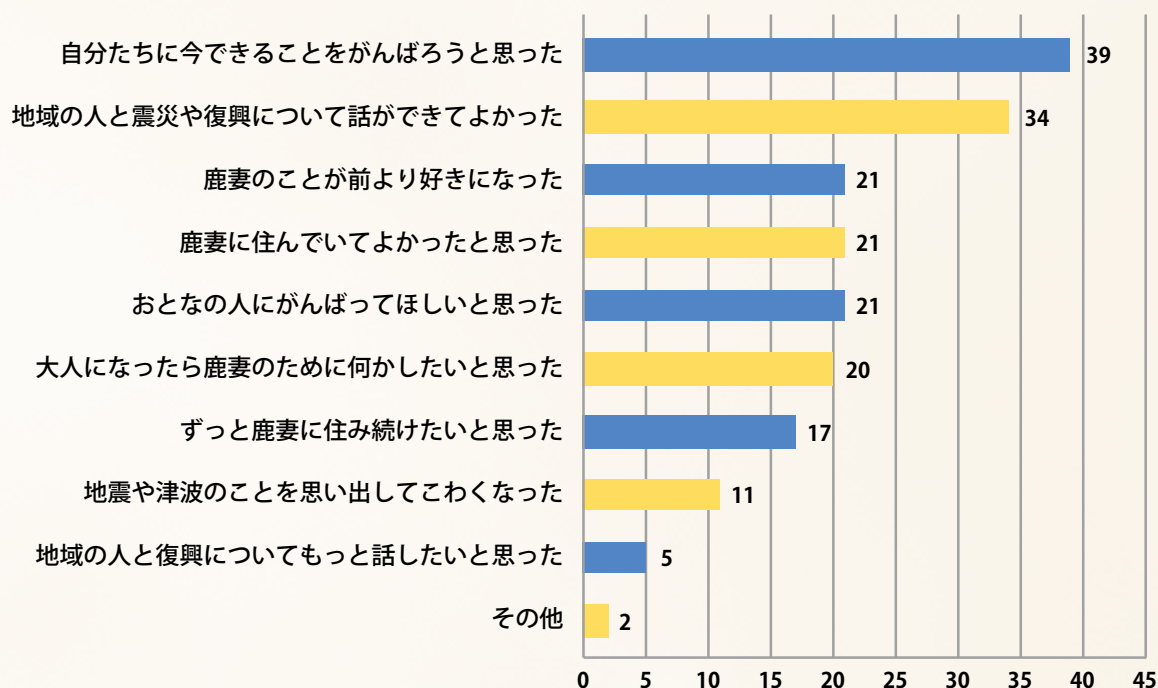


図3, 4, 5

出典：桜井愛子、徳山英理子、佐藤健、村山良之「石巻市の小学校における『復興マップづくり』の実践」安全教育学研究第14巻、(1) P.47-61, 2014.

4 | 「復興・防災マップづくり」実践校の取組み

2012（平成 24）年度より鹿妻小学校で「復興マップづくり」として始められたプログラムは、2018（平成 30）年度までに「復興・防災マップづくり」として以下の実践校（下記図 6、表 1）で取組まれています。

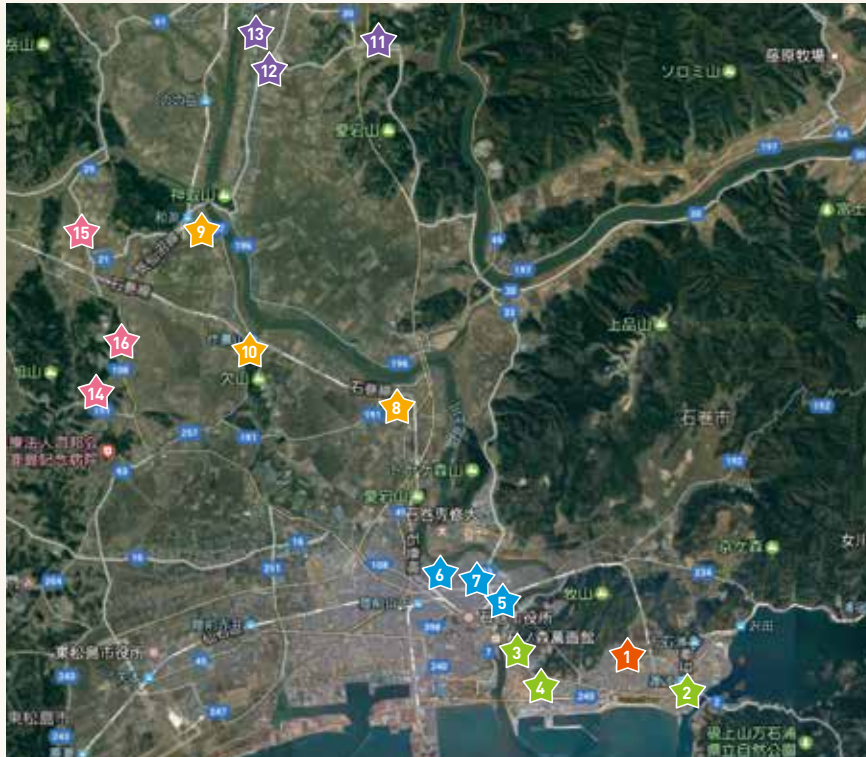


図 6：復興・防災マップ実践校位置図

表 1 復興・防災マップ実践校リスト

学校名	実践開始年	学校名	実践開始年
★1 鹿妻小学校	2012 年度	★9 和渕小学校	2016 年度
★2 渡波小学校	2014 年度	★10 河南東中学校	2016 年度
★3 湊小学校	2014 年度	★11 桃生小学校	2017 年度
★4 湊中学校	2014 年度	★12 中津山第一小学校	2017 年度
★5 住吉小学校	2015 年度	★13 桃生中学校	2017 年度
★6 中里小学校	2015 年度	★14 北村小学校	2018 年度
★7 住吉中学校	2015 年度	★15 前谷地小学校	2018 年度
★8 鹿又小学校	2016 年度	★16 河南西中学校	2018 年度

●各学校での活動内容は、別冊①「実践事例集」をご覧ください。